

大阪ブロック例会（代表：大川真一郎副会長）

◆第2回問題解決法「15億円の負債をどうやって克服したか」

大阪ブロック例会「第2回問題解決法」を平成22年5月12日（水）、大阪・（株）ユニオン2階会議室で開催。

会員ら21名が参加し、懇親会および講演会が開かれた。

まず、大阪ブロックの副代表の谷岡一治・タニオカドレス社長の開会の挨拶に続いて大川真一郎・大川創業社長の「15億円の負債をどうやって克服したか」と題する講演を聴いた。

JR学研都市線住道駅前に広がる一大ショッピングセンターが「オオカワグループ（大川創業）」の本拠地である。アイデアに富んだ企画が大川氏によって産み出され、綿密な計画の下に多彩な店舗展開、土地開発が行われている。

この事業の中心になり、次から次へと新しいアイデアを生み出している張本人が、社長の大川真一郎氏である。

大川氏は、三洋電機のエンジニアとして多くのヒット商品を手がけ、36歳で退社したのち本家の「オオカワ」を継いだ。そこで数々の難題にぶつかり、苦労の末今日の多様な事業を展開する「大川創業」を築き上げた。特にボウリング事業の失敗で15億円の負債を背負うという危機にも見舞われたが、それをアイデアと気力・行動力で乗り越えてきた人物である。

講演会終了後、場所を変え懇親会を開催。会員企業の経営上の問題を解決する糸口を見つけるとともに同志の親睦も深めた。

なお、講演の要旨は次のとおり。

まずはじめに、皆さんは松永安佐^エ門という人をご存知だろうか。「電力王」「電力の鬼」と言われた明治8年生まれの財界人である。

この松永氏曰く、真の経営者になるには、①大病、②倒産、③刑務所暮らしの3つを経験していなければならない、とのことである。私は③の刑務所には入りそこねたが、松永氏によると、当時の監獄の飯は麦八割、米二割のご飯に漬物が二、三切れ付いているだけの極めて粗末なものであったらしい。

氏は会社を経営していたので、立派な弁当の差し入れがあったらしいが、監獄の規定では、監獄で用意した飯は残してはならないことになっていた。差し入れの弁当を食べれば監獄の飯が残る。仕方なく差し入れの弁当を断って監獄の飯だけにしたところ、却ってお腹の調子が良くなり、「監獄の経験は自分にとってよい勉強になった。」と氏は述懐している。

◆「鹿も四つ足 馬も四つ足」

小学4年生のころは体が弱く、死に直面しながら生きていました。その私の人生を大きく変えてくれたのが「鹿も四つ足 馬も四つ足」という歌の歌詞であった。友達は外で騒いで遊んでいるのに、なぜ自分だけが小児結核になって悶々と布団の中で暮らさねばならないのか、神も仏もあるものかと思っていたところ、ラジオから聞こえてきた歌が「鹿も四つ足 馬も四つ足」で始まる「鶉越の逆落とし」でした。

75日と長い間休んで、たまに学校に行くと、勉強もついていけない。しかしこの歌を聴いて元気、勇気をもらった。

元気にはしゃぐ鹿のような友達も、のろまな馬のような自分も同じ人間ではないか。あいつにできて俺にできないはずはない。やらない奴は馬鹿だ、と気付いたのである。馬鹿の語源がここにあるともその時思った。

◆世のため人のための新聞配達で体質改善

小学校4年のとき、やらない奴は馬鹿だと気付いて「いま何をすべきか」を考えた。考えた挙句思いついたのが「世のため、人のために役立つ仕事をしよう」という事で、4年生の後半から新聞配達を始めた。

冷たい冬の早朝も頑張り、6年生で卒業するまで2年4ヶ月間続けることが出来た。すると今まで病気がちで、もう明日はないと感じるほど体の弱かった自分が、この新聞配達のおかげで、いつの間にか病気であることも忘れてしまっていた。

そして、小学校の時は劣等生であったが、身も心も強くなり中学・高校の6年間は無遅刻、無欠席で皆勤賞までもらうことが出来た。

中学・高校と、卓球部で活躍し、学年ではチャンピオンになった。ところが、大学受験の時期になり、他の生徒は大方進学を決めていたが、私は進学も決めていなくこれから何をしたいのか目標を持っていなかった。私の父は質屋をしていたが後を継ぐのがとにかくいやであった。

◆フルートを買ってもらう約束のために阪大へ

とりあえず、同級生が阪大を目指している。あいつが行くのだったら、俺もできないはずはないと、阪大を受験したが、見事に失敗した。

それで、YMCAの予備校に行くことになった。皆シュンとうつろな顔をしている中、唯一人前田というおもしろい人物がおり、「俺は阪大のオーケストラのコンサートマスターになる」とみんなにアピールしていた。二日目も三日目も吼えているので興味を覚え、「俺も一緒に仲間に加えてほしい」とお願いした。ところが「コンサートマスターは一人で十分、19歳で初めてバイオリンをやっても無理だ、フルートぐらいなら良い」と言われたので、早速、家に帰って親父にフルートを購入して欲しいとねだった。父は「ヨシヨシ」と安請負してくれた。

◆目標ができた

ここで、私にも目標が出来た。オーケストラに入るという目標ができたおかげで、勉強も身に付き、1年間の浪人で阪大に入学できた。

そして、約束どおり、父にフルートを買ってくれと頼むと、父は「そんなこと言ったか、今までは府立の高校で月謝は安かったが、私立の予備校で1年間に5倍もする月謝を払わされ、しかも浪人の親だと恥ずかしい思いをさせて、その上にフルートを買えとは何ごとか、親不孝者め」と言うのである。

目標をフルートに一年間頑張ってきたのに父に断られてシュンとしていたら、父が「質流れの楽器があるよ」というので、もらったのがクラリネットであった。

◆ぜいたくは敵だ

今の若い人たちは、気に入ったものを見たらすぐ欲しいと買ってしまふ。私の場合、昔から父が質屋を営んでいるせいか、それほど衝動的にもものに飛びつかない。子供の時によく言われたのが、「質屋に来るような人は、みんな、うちより贅沢している。美味しいものをたべ、贅沢な物を持っている。身分不相応なことをするから貧乏になるのや」である。

収入以上に物を買ったら、赤字になるのは当然である。物が欲しくなっても、絶対にその時に買わない。欲しいと思ったら、その日から必要な金額を貯金してゆく。何ヶ月か、何年か経ってお金が溜まった時にまだ欲しかったら、現金で安く叩いて買う。だいたい、時が経てば欲しくなくなるのが普通である。貧乏している人を見てみると、欲しくなったらすぐ買ってしまふように見受けられる。そういうものは大抵すぐに要らなくなる。各家庭に氾濫しているもの健康家具等は、衝動買いしたものばかりではないか。中には一度も使わずに倉庫にしまっているものすらあるようである。

それにお金もないのに欲しいものをすぐ手に入れようとすると、月賦で買わなければならない。月賦だと定価でしか買えないし、高い利息もつく。お金を持っていれば、現金で叩いて安く買える。定価以下でしかも利息もつかない。かなり違うと思う。

◆三洋電機に入社、50 件の新製品を開発

大学を卒業して、三洋電機に入社した。いろいろ新しい課題を与えられて、無い知恵を絞っているうちに、2 ドア冷蔵庫やアートドア冷蔵庫等の開発をいろいろやらせてもらった。アートドアでは無茶苦茶儲けさせてもらい、3~4 年、何も仕事しなくてもよいからアメリカで遊んでこいと言われたほどである。

そこで、英会話と車の運転を習っている時に、工場長が鳥取三洋の常務に栄転することになりお前も行ってくれと言われアメリカ行きは中止。今度は鳥取三洋で冷蔵庫ではなく暖房器をやらされた。そこでは四つ折りのホーム炬燵を考案し、このアイデアで百万台売れた。この記録は未だに破られていない。

この私の経験からの「何事もやろうと思ったことは最後まで諦めずにやれば、必ずできる」ということだけは肝に銘じていただきたい。

鳥取三洋で 3 年間に 50 件の新製品を開発し、電気屋さんの店頭で私の作った製品が並んでいるのを見る喜びを感じて、人生一番幸せと思っていた。しかし、家庭の事情で本家を継ぐことになり、その一年後に叔父が亡くなったのである。

◆15 億円の借金

そこで相続税が 1 億 5 千万円かかったが、その借金を早く返そうとボウリング場事業に手を出し、15 億円の借金を作る羽目になり、見事に失敗した。

15 億円の借金を返済するには月に 3 千万円返さなくてはならない。大変苦しんだ。まだ 36 歳で事業を継いだばかりだったので、「毎月 3 千万円の返済ですよ」といわれて「はいはい」と気前よく判をおしたのだが、それがどんな大金であるか全くわかっていなかった。

15 億円の借金といっても、実際に銀行が貸してくれるのは 12 億円で、残りの 3 億円は銀行に強制的に積み立てさせられる。一時はそれを恨んだが、そのおかげで最初の十ヵ月間は食いつなぐことが出来たので、有り難く思わねばならない。

なんとか首が繋がったのである。

人間というものは、苦しいときに神様に頼りたがるものである。私も人並みにいろいろと神頼みをしましたが、結局助けてくれたのは、クラリネットだった。だからクラリネットは私にとっては神様である。

◆いざ大変な時は息を吐け

クラリネットを吹いて息を吐けば、気分的に落ち着いてくるし、気分転換にもなっていて、いろいろ事業の再建策が浮かびあがってきた。

そして、社員も「社長があんな風にのんきにクラリネットを吹いているところを見ると、うちの会社もまだまだ大丈夫なんやな」と考え、仕事に精を出してくれたので、相乗効果もあったわけである。

最初は借金はどうしても返さなければならないと思っていましたが、クラリネットを吹いているうちに、借金は返さなくてもいいんだ、利息だけを払っておけばいいんだと、いうふうに考えが変わった。

月に3千万円を返すというのは元利合計で、利息だけなら月に5百万円で済むことが分かり、これを思いついてホッとした。

皆さんに覚えておいていただきたいのは、いざ大変だ、どうしようかという時には息を吐くことある。息を吐けばリラックスできる。良いアイデアが浮かぶ。息を吸うと悲しくなる。一大事の時は特に息を長く吐く事を覚えておいてほしい。

◆刑務所の塀の上を歩いた

月5百万円の利息を払うために先ずパチンコ屋に空き地を賃して、家賃月350万円。ボウリング場の地下駐車場を食品市場にして家賃月160万円。「利息月5百万、5百万」とお経のように唱えていたら、月10万円多く入ることになる。地下駐車場を食品市場にする際に役所に相談したところ、小売商業特別措置法という法律により、近隣の食品市場と歩行距離で7百メートル離れていなければならないといわれ、これはクリアしていた。ところが、その問い合わせの後、契約書を作成したり、テナントを募集している間に、入り口から入り口までの歩行距離7百メートルが、敷地から敷地までの直線距離で7百メートルの制限距離に法律が変更されており、役所に申請に行った際、「大川さん、法律違反です。」といわれた。しかし、食品市場のテナントから、すでに保証金1億6千万円を受け取り、借金の一部返済と改造費に使ってしまっている。契約解除となれば、テナントに全額返金しなければならないが、金がない。刑務所に入ってコツコツ貯めて返済するとなると、私から十七代もかかる。我が人生で最大のピンチである。そこで、恐る恐る弁護士を訪ねた。すると、その弁護士は「ハッハッハッ。あの法律は俺が作った。潰すのは訳ない。もらう家賃を業務委託料として支払ってくれればよい。」と言われた。こうして首がつながり、塀の向こう刑務所側に落ちずに済んだのである。

◆ポップタウン住道オペラパーク

私は関西フィルハーモニー管弦楽団(関フィル)の代表を20年間勤めていたので、関フィルがもっと活動できるようにオペラハウスを建てるという発想を18年前からもっていた。そして数年後「よし、オペラハウスを建てるんだ」と決心をした。

18年前に考えたのはスペイン風の建物で、そのトレドの城を参考にしようとしてい

たのですが、当時バブルが崩壊して、銀行に借りるところか貸しがしに遭って金策に苦労していた。

ところが、平成 19 年に担保の評価方法が従来の土地本位制から収益還元方式に変更になったため投資を受けることができ、平成 20 年 3 月 4 日に漸く第一歩として「ポップタウン住道オペラパーク」1 号棟を完成。1 階にダイエーの食料品売り場を設け、2 階にはユニクロ、3 階にはアカチャンホンポとそのほかテナント 40 店を入居させた。

そして 2 号棟には京阪百貨店が出店。京阪電鉄沿線以外のところでの初めての出店で話題になったが、平成 22 年 10 月初旬竣工予定である。

今は 3 号棟にも夢を馳せ、3 号棟完成の暁には「オペラハウス」が実現する。ホテルも併設する。

よく「オペラハウスはまだかまだか」と聞かれるが、私はいつも言う。「ベートーベンが 21 歳の学生の時に第九の歓喜の歌を作ると宣言して、出来たのは 55 歳の時で 34 年間かかっており、それに比べるとまだ早い方だ」。

夢は持ち続けることが大切である。「継続は力なり」

ご清聴を感謝いたします。

【プロフィール】

大川真一郎

昭和 8 年

大阪大学を卒業後、三洋電機に勤め、開発技術者として

「2 ドア冷蔵庫」を開発し、業界の寵児となる。

その後、家業を継承し、昭和 46 年に当社設立。

昭和 47 年 11 月にポップタウン住道を開業し、現在に至る。大東市商工会議所会頭を平成 16 年～平成 19 年の 3 年にわたり務めた他、平成 16 年には、ロータリークラブ 2660 地区ガバナー補佐を務める。また、自身もクラリネット奏者として舞台に立つことが多く、本業の他、企業メセナに積極的に取り組む。ことに、永く「関西フィルハーモニー管弦楽団」の代表を務めた功績を認められ、企業メセナ協議会より、1998 年「メセナ大賞」の「メセナ育成賞」を受賞した。

また、2008 年夏の高校野球優勝校「大阪桐蔭高校」の校歌の作曲者でもあり、JR「学研都市線」の名付け親の一人でもある。

現在は、企業家や経営者向けセミナー、社会人大学等で「アントレプレナー育成」、「企業活動と文化」、「経営論」のセミナーや講演活動を積極的に行う。